

平成 29 年度

作物	小ギク(彼岸出荷用)	地域	沖縄群島												
病害虫名	黒斑病・褐斑病														
1月の発生量（現況）	(発生なし)並														
2月の増減傾向	→														
増減傾向の根拠	発病葉率の平年の発生推移から、1月と発生量は同程度と考えられる。														
発生量の根拠（調査結果）															
<ul style="list-style-type: none"> 1月中旬の調査の結果、発病葉率は0%（前年0%、平年0.1%未満）と平年並であった。 															
<p>(今年のデータ)</p> <table border="1"> <caption>黒斑病・褐斑病の発生推移 (今年のデータ)</caption> <thead> <tr> <th>月</th> <th>今 年 (%)</th> <th>平 年 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>12</td> <td>0.00</td> <td>0.08</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>0.00</td> <td>0.02</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>0.00</td> <td>0.00</td> </tr> </tbody> </table>				月	今 年 (%)	平 年 (%)	12	0.00	0.08	1	0.00	0.02	2	0.00	0.00
月	今 年 (%)	平 年 (%)													
12	0.00	0.08													
1	0.00	0.02													
2	0.00	0.00													
<p>(過去2年のデータ)</p> <table border="1"> <caption>黒斑病・褐斑病の発生推移 (過去2年のデータ)</caption> <thead> <tr> <th>月</th> <th>2015年 (%)</th> <th>2016年 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>12</td> <td>0.20</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>0.00</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>0.00</td> <td>0.00</td> </tr> </tbody> </table>				月	2015年 (%)	2016年 (%)	12	0.20	0.00	1	0.00	0.00	2	0.00	0.00
月	2015年 (%)	2016年 (%)													
12	0.20	0.00													
1	0.00	0.00													
2	0.00	0.00													
防除のポイント															
<ul style="list-style-type: none"> 発病葉や摘葉等による残渣は発生源となるため、ビニール袋に入れるなどして早めには場外に持ち出し処分する。 除草などにより、ほ場の通風をよくする。 水滴の跳ね上がりを防止するため、敷草を行う。 															

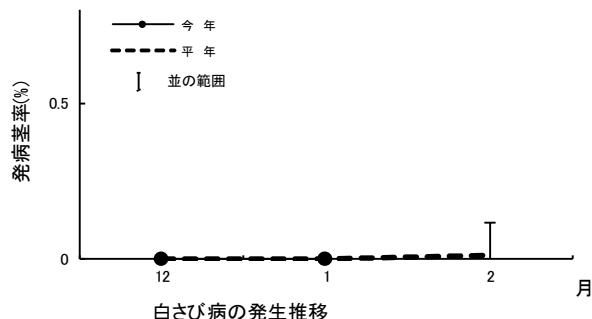
平成 29 年度

作物	小ギク(彼岸出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	① 白さび病		
1月の発生量 (現況)	(発生なし)並		
2月の増減傾向	↗		
増減傾向の根拠	今後1か月の気温が平年より低い見通しから、1月より発生量は増加すると考えられる。		

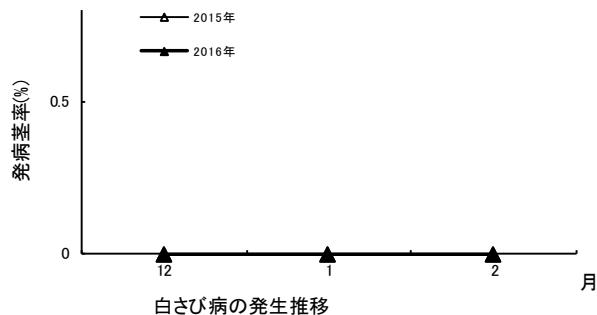
発生量の根拠 (調査結果)

- 1月中旬の調査の結果、発病茎率は0%（前年0%、平年0%）と平年並であった。

(今年のデータ)



(過去2年のデータ)



防除のポイント

- 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、腋芽は除去し、通風をよくする。
- 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどして場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
- 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
- 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
- 栽培終了後は近隣ほ場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。

平成 29 年度

作物	小ギク(彼岸出荷用)	地域	沖縄群島												
病害虫名	② アザミウマ類														
1月の発生量（現況）	並														
2月の増減傾向	↓														
増減傾向の根拠	成虫数の平年の発生推移から、1月より発生量は減少すると考えられる。														
発生量の根拠（調査結果）															
<ul style="list-style-type: none"> 1月中旬の調査の結果、茎当たり成虫数は0.1頭未満（前年0.6頭、平年0.1頭）と平年並であった。 発生種は、クロゲハナアザミウマであった。 															
<p>(今年のデータ)</p> <table border="1"> <caption>Estimated data for the current year (2017)</caption> <thead> <tr> <th>Month</th> <th>Adult number per plant (This year)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>12</td> <td>~0.15</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>~0.02</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>~0.01</td> </tr> </tbody> </table> <p>アザミウマ類の発生推移</p>				Month	Adult number per plant (This year)	12	~0.15	1	~0.02	2	~0.01				
Month	Adult number per plant (This year)														
12	~0.15														
1	~0.02														
2	~0.01														
<p>(過去2年のデータ)</p> <table border="1"> <caption>Estimated data for the past two years</caption> <thead> <tr> <th>Month</th> <th>2015年 (△)</th> <th>2016年 (□)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>12</td> <td>~0.1</td> <td>~0.1</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>~0.1</td> <td>~0.55</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>~0.01</td> <td>~0.01</td> </tr> </tbody> </table> <p>アザミウマ類の発生推移</p>				Month	2015年 (△)	2016年 (□)	12	~0.1	~0.1	1	~0.1	~0.55	2	~0.01	~0.01
Month	2015年 (△)	2016年 (□)													
12	~0.1	~0.1													
1	~0.1	~0.55													
2	~0.01	~0.01													
<p>防除のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる生長段階であっても、同時に防除を行う。 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。 															

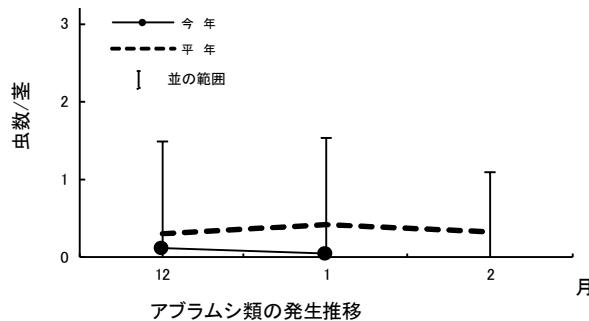
平成 29 年度

作物	小ギク(彼岸出荷用)	地域	沖縄群島
病害虫名	アブラムシ類		
1月の発生量 (現況)	並		
2月の増減傾向	→		
増減傾向の根拠	成虫・幼虫数の平年の発生推移から、1月と発生量は同程度と考えられる。		

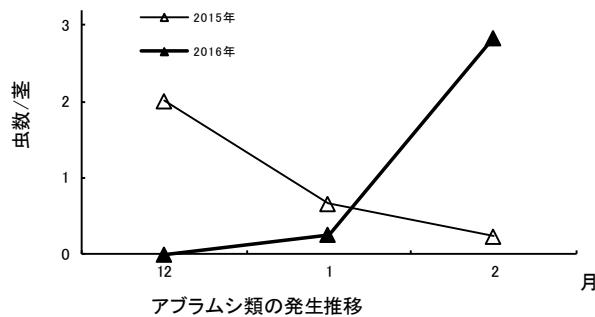
発生量の根拠 (調査結果)

- 1月中旬の調査の結果、茎当たり虫数は0.1頭（前年0.3頭、平年0.4頭）と平年並であった。
- 発生種は、ワタアブラムシであった。

(今年のデータ)



(過去2年のデータ)



防除のポイント

- ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- シルバーポリテープを畦上に張り出すか吊したり等して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- 増殖が早いので、新葉や上位葉に多いことに留意し、早期発見・早期防除に努める。

平成 29 年度

作物	小ギク(彼岸出荷用)	地域	沖縄群島												
病害虫名	ハモグリバエ類														
1月の発生量（現況）	(発生なし)並														
2月の増減傾向	→														
増減傾向の根拠	寄生葉率の平年の発生推移から、1月と発生量は同程度と考えられる。														
発生量の根拠（調査結果）															
<ul style="list-style-type: none"> 1月中旬の調査の結果、寄生葉率は0%（前年0%、平年0.2%）と平年並であった。 															
<p>(今年のデータ)</p> <table border="1"> <caption>ハモグリバエ類の発生推移 (今年のデータ)</caption> <thead> <tr> <th>月</th> <th>寄生葉率(%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>12</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>0.00</td> </tr> </tbody> </table> <p>ハモグリバエ類の発生推移</p>				月	寄生葉率(%)	12	0.00	1	0.00	2	0.00				
月	寄生葉率(%)														
12	0.00														
1	0.00														
2	0.00														
<p>(過去2年のデータ)</p> <table border="1"> <caption>ハモグリバエ類の発生推移 (過去2年のデータ)</caption> <thead> <tr> <th>月</th> <th>2015年 (%)</th> <th>2016年 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>12</td> <td>0.30</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>0.10</td> <td>0.00</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>0.10</td> <td>0.00</td> </tr> </tbody> </table> <p>ハモグリバエ類の発生推移</p>				月	2015年 (%)	2016年 (%)	12	0.30	0.00	1	0.10	0.00	2	0.10	0.00
月	2015年 (%)	2016年 (%)													
12	0.30	0.00													
1	0.10	0.00													
2	0.10	0.00													
<p>防除のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ほ場内外のウリ科・ナス科・マメ科などの雑草は発生源になることから、除去する。 幼虫期間が比較的短いため、葉の表面に産卵痕や食害痕がみられたら防除を開始する。 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。 農薬やその他の防除資材の効果の判定は幼虫の体色で判定する。 生存時の幼虫の体色は黄色で、死亡すると黒変する。 															